

## ワクチンギャップの克服とキャッチアップ接種の重要性 —WHO麻疹排除国認定から何を学ぶ—

峯 真人

医療法人自然堂 峯小児科 院長

### [麻疹排除国認定からの教訓]

2015年3月WHOは日本を麻疹排除国と認定した。しかし1999年当時、麻疹患者は年間20万人以上、死亡者も50人以上にのぼる状況であった。これを受け日本小児科医会公衆衛生委員会では、麻疹重症例把握を目的に、各都道府県2～3箇所の病院を選び、2000年9月から2001年8月までの1年間に麻疹で入院した患者のアンケート調査を行なった。

回答が得られた43都道府県、117病院の1年間の麻疹入院患者数は2,016名にのぼり、うち予防接種未接種者が92.3%。さらに麻疹肺炎、細菌性肺炎、脳炎などの合併症併発者が28.9%、うち4名が死亡、2名に後遺症が残るとの驚くべき結果を得た。

これを受け、日本小児科医会は「1歳になったら可能な限り早期に麻疹ワクチンを」とのキャンペーンを開始した。予防接種率の上昇とともに重症例数は激減し、調査開始5年目の2005年調査では入院患者数はわずか3人まで減少したが、2006年調査からその数は再び増加へと向かった。しかしその内容は年長児、しかも麻疹ワクチンを1回接種済みの重症化症例であった。この事実は麻疹ワクチンの2回接種の必要性を求めるインパクトとなり、2008年から5年間の限定で中学1年生、高校3年生への3期、4期の2度目の接種が開始され、ついに麻疹排除国にたどり着いた。

これはワクチンで感染症を予防するには、できる限り多くの感受性者に必要な回数のワクチンの完了が必要という、キャッチアップ接種の重要性を示す良い教訓となった。

### [予防接種における現状と課題]

近年日本で接種可能なワクチンが増え、予防接種法などの制度が変更され、ワクチンギャップはかなり克服されてきた。しかし未だ複数のワクチンは任意接種のままであり、風しん・水痘などのように定期接種化されたワクチンが存在する中、成人を含めた年長者の多くが感受性者として残されている疾患も多い。今後VPDをわが国から排除するためには、任意接種ワクチンも含めた、ワクチン接種率のさらなる上昇と維持であり、そのキーワードがキャッチアップ接種である。

キャッチアップとは、遅れを取り戻すとの意味がある。本来複数回接種が必要なワクチンが、何らかの理由で必要な回数の接種がなされていない場合、標準的な接種間隔を過ぎていても、気がついた時点で早期に必要な回数の追加の接種を行うことにより十分な抗体が獲得されるという事実を認識し、キャッチアップ接種を行うことが重要である。

前述した麻疹ワクチンに対し、風疹については、2013~2014年にかけて、成人男性を中心に大規模な流行が見られ、先天性風疹症候群の児が50名近く発症した。この流行には、過去風疹ワクチン接種対象は中学生の女子にのみであり、成人男性を中心とした多くの感受性者は未接種のままの背景がある。

予防接種の目的は個人防衛、社会防衛、そして感染症の排除である。必要な人すべてに、必要な回数のワクチンを接種し、VPDに罹らない・VPDをうつさない社会を作っていかなければならない。